

## ロシア辺境の拡大とカザーク

その他のタイトル	The Expansion of Russian Frontier and Cossacks
著者	中村 仁志
雑誌名	関西大学文学論集
巻	56
号	4
ページ	73-91
発行年	2007-03-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/12495">http://hdl.handle.net/10112/12495</a>

# ロシア辺境の拡大とカザーク

中 村 仁 志

## はじめに

ロシアの歴史における顕著な特質の一つは、ロシアが世界史上でもたぐい稀な領土拡大を遂げた点に求められる。ロシア国家の形成の歴史とは、領土の周縁部に位置する辺境の絶え間ない前進の歴史であり、その版図はユーラシア北部地域の大半をおおい、一時はアメリカ大陸の一部を含めるまでに広がっていた。その間、近隣諸国との境界域をなしていた辺境の外側には、つぎつぎとあらたな辺境が形成された。それにともない、かつて辺境であった地域は国境の内側へと取り込まれ、「内部化」していった。本稿は、こうしたロシアの辺境拡大の特性を、その重要な担い手であったカザークの歴史と関連させながら検討するのを目的としている。

ロシア史上の辺境とは、基本的には、ロシアの領土のなかの歴史的な中核以外の部分として定義される。すなわち、ロシア国家の骨格が形成された後、あらたな領土として併合、編入された地域が辺境である。ロシア史の歴史的な中核とは、一般的にはロシアの国家形成の始源、9～13世紀のキーエフ・ルーシへとさかのぼる。となれば、この中核部分たるキーエフ・ルーシの時代にはその領域の外にあり、後になってあらたにロシアの国家領域に含まれるようになった地域が辺境とみなされよう。

こうした歴史的な中核以外の周縁部を辺境とみなすのは、ロシア史のみにかぎったことではないであろう。ただ、ロシアの場合、問題を多少とも錯綜としたものになっているのは、歴史的な中核たる部分に現在ロシアとは別個の独立国たる

ウクライナ、ベラルーシが含まれているという点にある。キーエフ・ルーシの中核部分であったウクライナ・ベラルーシ地域は、キーエフ・ルーシ衰退後はモスクワを中心に形成されたロシア国家とは別の歴史をたどった。その後ここはロシア帝国内の一地域となり、さらにソ連の崩壊にともなってあらたな独立国としての道を歩むようになった。

かつての歴史的中核であったという意味において、また現在はロシアとは別個の国家であるという意味において「辺境」らしからぬ様相をもっているウクライナ・ベラルーシであるが、それでも一時は「ロシアの辺境」的な性格をおびていたと考えられないわけではない。ただし、その際にはロシアの歴史的中核をキーエフ・ルーシではなく、それより後のモスクワ大公国に見なければならぬ。

かつてキーエフ・ルーシの北東の辺地に位置し、勢力も弱小であったモスクワは、しだいに力をたくわえて分裂していたロシアの諸地域を統合していった。その過程に一つの区切りがつくのが15世紀後半モスクワ大公国のイワン3世によるノヴゴロド併合であるが、これをもって一応の完成を見るロシア統一国家をロシアの中核とみなせば、それ以降にロシア国家の領土となったウクライナ・ベラルーシも辺境たるの相貌をおびることとなるのである。

キーエフ・ルーシかモスクワ大公国か、いずれをロシアの歴史的中核と見るにせよ、それ以外の場所が永劫不変に辺境でありつづけたわけではない。辺境とは、本来過渡的性格をおびた概念であって、ロシアの版図の範囲、国家領域の変化とともに移り変わっていった。

ロシアの近隣にあって在地の諸民族の勢力が強く、ロシア政府の支配がおよばなかったような地域が、しだいにロシア国家の影響を受けるようになる。これが辺境化のはじまりである。ついでロシアの君主の支配を認め、その宗主下に入っていく従属化、ロシア人住民の移住による人口構成の面での「ロシア化」、それにともなって生ずる社会経済的な諸側面での中央地域への接近。辺境とは、こうしたプロセスが進展しつつある状態を指しており、ロシアの周縁であった地域が、完全にその領土の一部と化すまでの移行過程、すなわち「ロシア化」

しつつある時期が本来の意味での辺境と呼びうるであろう。

そして、いったん辺境化した地域も、いつまでもその状態にとどまりつづけるわけでない。ロシア国境のさらなる前進につれ、かつて辺境であった地域の外側にあらたな国境地帯が形成されていく。そうして辺境が「内部化」するにつれ、過渡的性格をもった「辺境」としての特性も弱まっていくのである<sup>1)</sup>。

こうした辺境の性格の移り変わりは、また辺境の住民と中央政府との関係に強い影響を及ぼさざるをえない。本稿でも見ていくように辺境の民であったカザークとロシア国家との関係もこの辺境の性格の変遷と並行しながら変化していったのである。

## 1 辺境の地域的特性

ロシア国家の拡大、国境の前進は、東西南北さまざまな方向で進捗を見たが、いずれの方向で辺境が形成されたかによってその性格は大いに異なっていた。そして、その辺境の特性は、ロシアとカザーク集団との関係にも大いに影響することとなったのである。

ロシアの辺境のうち、カザークの歴史においてもっとも大きな意味をもっていたのは南部の辺境である。ロシアの南方には、かつてキプチャク汗国が支配したステップが広がっており、15-16世紀にあってもテュルク系のタタール人が遊牧生活を営んでいた。そしてまた、ここは、ロシア国家の支配がまだおよばない地であったため、領主のもとから逃亡したロシア人農民が追跡の手からのがれるため逃げ込んでくる避難所でもあった。カザークは、この逃亡ロシア人とタタール人との共生関係のなかから生じてきた。すなわち南部辺境こそは、カザーク揺籃の地というべき場所であった。

カザークは、成員間の平等や指導職の選出制をはじめとする自治を社会生活の根幹とし、この原則にもとづいて軍団と呼ばれる軍事=行政組織を築いた。そしてこの軍団をもって半独立の国家組織としてロシア政府と対峙したのである。それゆえ、ロシアとカザークの関係は、一種の国際関係たるの相貌をおびており、両者の交渉はタタール人の諸汗国やトルコ=オスマン朝との関係をは

じめ、ロシア南方の勢力バランスに左右されながらすすめられた。

カザーク揺籃の地である南部辺境についてカザークの歴史と深い関係をもっていたのが、ロシア東部の辺境である。東経60度の線に沿って走るウラル山脈は伝統的にロシアをヨーロッパ・ロシアとアジア・ロシアの二つの部分に分かつ境界といわれてきた。ロシアの東西の境、ひいてはヨーロッパとアジアとの境とされるこの山脈の東側がロシアの支配下に入ったきっかけは、カザークの遠征行であった。すなわち、史上有名なエルマークの遠征である。

1581年（一説には1579年）、自由カザークの流れをくむエルマークとその配下の一団のカザークがシベリアへの遠征に進発した。カザークの向かった先は、タタール人勢力の一つであったシビル汗国であり、遠征隊は、翌年首尾よくクチュム汗が治めるシビル汗国の首都カシュルイク（イスケル）の占領に成功する。この挙によってエルマークはシベリアの征服者として後世に名を残すこととなった。

しかし、実際のところは、エルマークの勝利は一時的なものでしかなかった。征服はいまだ完了とは程遠い状況にあり、勢力を立て直したシビル汗国勢が反攻に出ると、エルマークの一党は苦況に陥った。一握りのカザークにとっては、シベリアの苛酷な環境のなかで占領地を維持しつづけるのは荷の勝ちすぎる仕事であったのである。ここでエルマークがとった打開策は、使者をモスクワに送り、征服地をツァーリ、イヴァン4世に献じるというものであった。エルマークが派遣した使者は1582年12月6日にモスクワに到着したが、その後この日は、シベリア・カザーク軍団ならびにその流れを汲んだセミレーチエ・カザーク軍団の公式の創設日となった<sup>2)</sup>。

エルマークの献上を契機としてシベリア征服の主役の座は、ロシア国家に移った。エルマークが1585年にシビル汗国勢との戦いで斃れた後も、ロシア政府はシベリアの地へと兵員を送り込み、ここに城市を築いて征服活動をおしすすめ、ついに1598年、最終的にシビル汗国を併合するにいたる。その際、あらたにロシアより派遣されてきた勤務者たちは、シベリアに残っていたエルマークの配下と合流した。シベリア・カザークは、この両者の結合を核として形成さ

れていったのである。

ロシア史上のカザークには、もともと二つのカテゴリーが存在した。一つは自由カザーク、もう一つが勤務カザーク（都市カザーク）である。通常カザークとしてイメージされているのは自由カザークの方で、南方に逃亡したロシア人農民と先住のタタール人との共生の中から自由民戦士の共同体としての軍団を形成してきた。これに対し自由カザークとはかなり色合いが違うカザークの一群も存在し、都市カザークないし勤務カザークと呼ばれていた。彼らは端的に言えば、ロシア辺境の諸都市における軍事勤務者であった。勤務カザークは、軍令の指揮下に都市防衛の任をはたし、その代償として一定の面積の土地を耕作、草刈の用に供する権利を認められていた<sup>3)</sup>。

二つのカザークのカテゴリーのうち自由カザークが南部辺境で誕生し、組織としての成長をとげたのに対して、シベリアをはじめとする東方の辺境は勤務カザークの活動の場としての性格が強かった。エルマーク自身は自由カザークであったが、彼がはじめたシベリア征服をひきついだロシア国家はカザークを数ある軍事勤務者の一カテゴリーとして顧使しながら征服を推し進めたのである<sup>4)</sup>。

南方や東方の辺境とくらべカザーク史のうえで特異な展開をとげたのが西方の辺境である。この方面の特殊性は、何よりもまず辺境のなかでのウクライナの特異な性格と関わっていた。すなわち、かつてキーエフ・ルーシ時代のロシアの歴史的中核であり、ロシア国家に編入したあとも自立をめざしついに独立をはたすというウクライナの歴史のありようである。

このウクライナの南部では農奴主のもとから逃亡した農民たちが15世紀後半よりウクライナ・カザークの集団を形成するようになった。そのなかでも、ドニエプル川の早瀬のかなた（ザポロージェ）に集ったカザークの一群は、1530年ごろ軍事=行政の中心たるセーチ（本営）を作り上げ<sup>5)</sup>、ザポロージェ・カザークと称されるようになる。

ウクライナとザポロージェ・カザークは、17世紀半ばまでポーランド王の宗主下に置かれていたが、1648年にボグダーン・フメリニーツキーを指導者とす

る対ポーランド反乱に立ち上がったのを契機として、ウクライナの人々はポーランドから距離をおくようになった。その後、ウクライナの人々は四囲の勢力との連携を模索し、ついに1654年1月ペレヤースラフで開かれたラーダ(総会)において、ロシアのツァーリの支配下に入ることを決議した。これ以降、ウクライナはしだいにロシア国家の一部に変えられていく。しかし、ウクライナは完全に「ロシア化」したわけではなく、機をみては政治的な自立をはかろうとする試みがくりかえし見られた。このなかで「ウクライナの息子」としてポーランドやトルコ=オスマン朝との提携も視野に入れながら活動したのがザポロージェ・カザークであった。ドン・カザークをはじめとする「ロシアのカザーク」がしだいにツァーリズムに服従し、ロシア国家の軍事機構の一部、帝国の辺境防衛用の兵力となっていたのに対し、「ウクライナのカザーク」たるザポロージェ・カザークは、「体制内化されざるカザーク」にとどまりつづけたのである。このため、ロシア政府はついに1775年、ザポロージェ・カザークの本営であるセーチの廢絶を敢行するにいたった。

## 2 南方辺境とカザーク

先述のようにロシアは、伝統的にはウラル山脈を境として西のヨーロッパ・ロシアと東のアジア・ロシアとに区別されてきた。これに対し、この区分は地理的には意味がないとし、東西の別よりも南北の違いこそが重要であると提唱したのがヴェルナツキーである。南北の区分とは、気候に関連して生まれる自然条件の差であり、これをもとにロシアは4つの層からなる地域に分割される。北から南へとツンドラ地帯、森林地帯、ステップ地帯、砂漠地帯である<sup>6)</sup>。

なかでもヴェルナツキーが、重視するのが、森林とステップの両地域とここに住む人々である。一方に森林地帯に拠るロシア人、他方にステップ草原で畜群を養う遊牧民、この両者の関係こそがロシアの歴史の基軸であり、その関係の変化こそがロシア史の時代区分を画する鍵となるというのである。

ヴェルナツキーは古代のロシア国家が形成される時期、ロシアの歴史の第1期よりつとにステップと森林の両地域を統合しようとする試みがなされていた

とする。森林＝ロシアの側からこの統合をはたそうとしたのがキーエフ・ルーシの支配者であったスヴャトスラフ公であり、ドニエプル流域、ヴォルガ下流域、ドナウ流域に統一的支配を打ち立て、ステップと森林を統合しようとした彼が972年に死亡したのをもち、この時期は終わりを告げる<sup>7)</sup>。

つづく第2期、972-1238年は、森林とステップの両勢力のあいだに激しい闘争が繰り広げられた時期として特徴づけられている。ルーシの諸侯とテュルク系の遊牧民であるクマン人（キプチャク人、ポーロヴェツ人）が互いに襲撃をくりかえした時代である。

3番目の時期、1238-1452年は、モンゴル人の侵入によってステップと森林の長きにわたる争いに終止符が打たれた時期である。東方から遠征してきた遊牧民のモンゴル人はステップのクマン人を輩下にいれるとともに森林のロシアの諸侯をうち破って服属させた。このステップ勢力の決定的な勝利により、ロシア人はキプチャク汗国の支配の下、「タタールのくびき」（「モンゴルのくびき」）に服することとなる。

これに対して、第4期は森林勢力の反攻の時期である。「タタールのくびき」からの解放をはたしたロシアは、逆に南方のステップに進出するようになり、ついにピョートル1世時代の1696年には黒海北東の内海であるアゾフ海の河口部にあるアゾフ要塞をトルコから奪取するまでになった。

その後、1696年以降の第5期は、ロシア国家のさらなる南下、領域の拡大によって、森林とステップが最終的に経済的統一体として統合されるにいたる過程である<sup>8)</sup>。

ステップと森林の関係から整序したロシアの時代区分にあつて、カザーク史のうえで重要なのは、15世紀のなかばから17世紀の終わりにいたる第4期であろう。ステップ勢力であったモンゴルが森林地域のロシアをも支配していた第3期が終了し、第4期へと時代が変わっていく際の重要な契機としてヴェルナツキーが指摘するのが1452年のカシモフ汗国の成立である。一般には「タタールのくびき」からの解放を画する出来事としては、1480年にモスクワ大公イヴァン3世と大オルダのアフマート汗がウグラ河をはさんで対峙し、ついに戦端



を開かないままアフマートが兵を引いた「ウグラの対陣」がいはれるが、それではなくカシモフ汗国成立の意義が強調されるのである。

1445年にカザン汗国においてマフムーテクが同国の創始者であった父ウルー＝ムハメッドを排し、汗位を奪った。これに反発したのが、マフムーテクの弟カシムであり、彼はカザンを去ってロシアの大公に仕えるようになり、オカ河畔に一市を得て、ここを拠点にタタール人の汗国を築いた。これがカシモフ汗国である。15世紀の後半は、キプチャク汗国の分裂傾向が顕著となっていく時期であるが、モスクワはこの状況を利用してタタール人勢力の一部を自己の陣営に引き入れようとしたのであり、カシモフ汗国の設立はその典型例として理解されよう。チンギス汗の血統者であるタタール人の皇子に所領を提供し、その代償としてモスクワ大公に対して軍事的奉仕をおこなうタタール人の汗国をつくる、いうなればモスクワの衛星国、従属国とでも呼ぶべきタタール人国家の創設である。

モスクワによるタタール人勢力の利用はこれにとどまらない。キプチャク汗国の分裂期に並立したタタール人の諸勢力のなかでキプチャク汗の後継者をもって認じたのは大オルダの汗であるが、これに対抗するためモスクワは、クリミア汗国と同盟を結んだ。その後、大オルダが没落すると、一転してモスクワとクリミアとの関係は緊張をはらむようになるが、この局面に際してもモスクワはタタール人をもってタタール人に対抗させようとした。カザン汗国の汗位をめぐる争いでクリミアと競合するようになったモスクワは、シャフ＝アリー（シガレイ）なるタタール人皇子を押し立て、クリミア汗の一族たるギレイ家の出身者をカザンの汗として推そうとするクリミアと張り合ったのである<sup>9)</sup>。

「タタールのくびき」からのがれるにあたりモスクワはさまざまな形態によるタタール勢力との連携を模索した。衛星国の設立、同盟の締結、傀儡汗の擁立などの手段を駆使して「南方における提携先」を確保しようとしたのである。カザークが誕生したのは、まさしくこの時期のことであった。ロシアの南方のステップ地域でタタール人と逃亡ロシアとの共生のなかからカザークが生まれ、しだいにロシア人の要素が濃くなっていった。この状況で、カザークもま

たロシアにとり「南方における提携先」の一つとなり、カザークをもってタタール人勢力を牽制するという手立ても取られるようになったのである。

その際、モスクワにとりカザークもあくまで数ある連携対象の一つであり、カザークとタタール人のいずれとの提携により重きをおくかは、時々事情しだいで変化した。たとえば、16世紀後半にイヴァン・コリツォーなる指導者のもとに活動していたカザークたちの動向である。彼らは、ロシア政府の指示によってロシアと敵対的な大ノガイのタタール人と戦っていたが、ロシアが大ノガイに対して懐柔策をとるようになるやロシアは彼らに対する態度を一変させた。大ノガイとの結びつきを重視するようになったロシアにとりカザークは邪魔者でしかない。モスクワと大ノガイの友好を妨げる悪者とみなされるようになったコリツォーの一派は、法の外におかれ「盗賊」カザーク呼ばわりをうけるようになったのである。このため彼らは、官憲の手のおよばない遠方へのがれんとし<sup>10)</sup>、最終的にはエルマークのシベリア遠征に合流することとなったのである。

16世紀の半ば以降、ロシア国家とタタール人諸勢力との関係は大きく変化した。カザン汗国、アストラハン汗国、シビル汗国とタタール系の諸汗国があいついでロシア国家によって征服された。その一方、オスマン朝を宗主としていたただクリミア汗国はロシアの明瞭な敵手となった。こうしてかつての「南方における提携先」であったタタール人勢力のうち、あるものがロシアの掌中におち、あるものが敵となってロシアの提携相手でなくなっていくなか、この役割を担うものとして重要性を増していったのがカザークである。

ロシア政府は、1570年代よりドン・カザークとの交渉を始めるようになった。イヴァン4世（在位1547-84年）以来、歴代のツァーリは1570, 71, 84, 92, 93, 94の各年にドンに勅書を送ってトルコ＝オスマン朝に向かう使節の警護とタタール人の迎撃を依頼し、代償として俸禄の施与を約したのである<sup>11)</sup>。

その後、リューリク朝の断絶後、あらたにツァーリとなったボリース・ゴドゥノフ（在位1598-1605年）の時、カザークが辺境諸都市へ往来するのを禁止するなどの措置がとられた<sup>12)</sup> ためドンとモスクワとの関係は悪化した。ボ

リース帝に対する敵愾心をつのらせたドン・カザークは、おりしも1604年に偽ドミートリーがボリース打倒の兵を挙げたのに呼応して、ロシアの中央部へと攻めこんだ。

偽ドミートリーの挙兵を契機としてロシアはスムータと呼ばれる大動乱の時期に突入する。このロシアの政治的混乱に乗じたのがタタール人勢力であった。動乱中ロシアは、毎年のようにクリミア汗国をはじめとするタタール人の諸勢力の遠征にさらされ、対タタール人用に南方に築かれてきた防衛網は灰燼に帰した。

このため、1613年に成立したロマノフ朝の為政者たちは、タタール人の攻撃に対抗すべくカザークを頼りとするようになる。1614年6月にはツァーリ、ミハイル（在位1613-45年）の使者がカザークの勤務を求めため俸禄とともにドンに送られた<sup>13)</sup>。また、翌年9月にはドン軍団の請願を容れて南部の辺境諸都市との交易が許された<sup>14)</sup>。

カザークはこうしてモスクワに対し俸禄の代償に軍役を提供するようになるが、これをもってカザークがロシア国家の臣民、ツァーリの忠良な僕となったわけではない。カザーク軍団とロシア国家の関係は臣従というよりも従属的な国としてのそれであった。ミハイル帝治下の1623年以来、ロシア政府は、ドン・カザークとの交渉を外交担当の官庁である使節庁（ポソーリスキー・プリカース）をつうじておこなった<sup>15)</sup>。17世紀にあってはモスクワの政府は、ドンを顔使すべき臣下としてではなく外交の相手、一種の独立国としてあつかったのである。

ドン・カザークの対外活動における自主性がいかに発揮されたのは、トルコ＝オスマン朝を相手どった場合であった。とりわけ焦点となったのが、アゾフ要塞をめぐる対応である。黒海の内海であるアゾフ海にはドン河が注ぎ込んでいる。その河口部に位置するアゾフを1471年に占領したトルコ＝オスマン朝は、これを東北の要衝とすべく防備を固めていた<sup>16)</sup>。ドン・カザークにとっては、このアゾフ要塞は、自分たちの安全をおびやかす脅威であったと同時に、クリミアやトルコ領への遠征に出撃するうえでの最大の障害となっていた。こ

のためドン・カザークは、つとに1574年にアゾフを攻めたのを皮切りとして数度にわたって要塞の占領を試みたのである<sup>17)</sup>。

一方、ロシア政府は、カザークによる「勝手な」攻撃が原因で当時世界有数の強国であったトルコと事をかまえる羽目になるのを恐れ、アゾフのトルコ勢と和すようドン・カザークに求めつづけた。つまり、アゾフ要塞をめぐる対応には、ロシアの外交政策に必ずしも従おうとせず、自身の方針を優先させようとしたカザークの態度が集約的にあらわれていたと言えよう。

1637年、ドン・カザークはザポロージエ・カザークなどの援軍を得てアゾフを攻撃し要塞占領に成功した。これに対し、トルコは1641年に大軍を送ってアゾフ要塞奪還に乗り出した。カザークは、トルコ軍の攻撃をなんとかしのぎきったものの、独力でアゾフを維持しつづけるのは無理と悟り、モスクワに使者を送ってアゾフをツァーリの支配下におくようお願いでた。しかし対トルコ戦に踏み切るのは無理と判断したロシアは1642年アゾフを放棄するようカザークに命じ、カザークはやむなく要塞から撤退した。かくしてアゾフをめぐる攻防は、ドン・カザークに自身の力の限界と、ロシア政府の意向を無視しての対トルコ軍事活動の無意味さを思い知らせることとなったのである。

アゾフを取り戻したトルコ＝オスマン朝は、禍根のもとを絶つべくドン・カザークに対し激しい攻撃をしかけるようになった。この攻勢にさらされたドンは、ロシアへの軍事的依存を高めていかざるをえず、しだいに自立的な地位を喪失していった<sup>18)</sup>。それにともない、カザークの対トルコ軍事行動の意味も大きく変わっていくこととなる。

ドン・カザークは1673、75年にはトルコに、1687、89年にはクリミアへ、1695、96年にはアゾフへと遠征したが、これらはすべてロシア軍の一員としておこなわれたものであった。ロシア国家が南方で展開した軍事活動、とりわけ1696年のピョートル1世によるアゾフ占領は、森林勢力であるロシアのステップへの南下の過程における重要な里程であった。ドンはロシア国家がこれを実現するにあたっての道具の一つとして機能したのである。かつてのカザークのアゾフへの遠征は、ロシア政府の意向に逆らって敢行されたという点で、ドン

の自立性のあかしであった。しかし、17世紀後半にあつては、それはロシア軍の一部としてのドン軍団の活動の一環であったのである。

また、ロシアによるアゾフ奪取は、ドンの地理的な位置づけを大きく変化させた。かつてドンはロシア国家にとって南方に突き出した前哨であり、ロシアの勢力圏の先端に位置していた。そのドンからさらに先方にあるアゾフがロシア国家の手中に落ち、ここがあらたな対トルコ最前線になると、後方にあったドンはロシア国境の内側に位置するようになった。ドンがロシアの「内部化」するにいたつたのである。この時の「内部化」は長くは続かず、1711年のプルート遠征の失敗によりロシアはアゾフ要塞をトルコに返還し、ドンは最前線にもどることとなった。

しかし、プルート遠征の敗北による国境線の後退は、あくまでロシア国境の前進、辺境拡大の過程における一時的な足踏みでしかなかった。ピョートル1世亡き後のロシアの諸皇帝の時代、ロシアはオスマン朝を圧倒しつつ南下をすすめていった。つとに1735-39年のロシア＝トルコ戦争に勝利したロシアはアゾフ要塞を取り戻した。これによってドンはふたたびロシア国境の内側となり、「内部化」する。さらにエカテリーナ2世（在位1762-96年）の時代、ついにロシアはクリミア汗国を自己の勢力下におさめ黒海北岸への進出を果たすこととなったのである。

ステップ勢力を圧倒しながら南下をすすめていった18世紀のロシア国家にとっては、カザークはもはや「南方における提携先」としての意味を持たず、ロシア軍の一コマとして自在に動かすべき存在であった。こうした方針を端的に示しているのが1721年3月3日の勅令であり、従来外務を担当する官庁の所管であったドン、ヤイク、グレーベンなどのロシアの諸カザークは、この勅令によって陸軍省の管轄のもとにおかれるようになった<sup>19)</sup>。ロシアにとりカザークは、その意向を忖度すべき外交交渉の相手なのではなく、国家の軍事組織の歯車の一つとなったのである。

### 3 辺境における異文化接触とカザーク

ロシアの辺境は、ロシア人と非ロシア諸民族の接触・交流の場でもあった。ロシアの周縁部に形成された辺境にロシア人が移住し、ここをあらたな生活圏としたのにもない、ロシア人と近隣の諸民族とのあいだには、敵対、友好、交易、通婚などさまざまな関係が取り結ばれた。

もともと非ロシア人の居住地であった地域がロシア人の生活圏になるにあたっては、大まかに言って二つのタイプがあった。一つは、多くの場合軍事的征服をともなった併合によるもので、ロシア国家の政治的支配の確立の結果としてあらたなロシア領となった地域へのロシア人住民の移住である。その場合、移住は、しばしば屯田政策を推進しようとするロシア政府の勸奨を背景にしてすすめられた。その一方、これと反対にロシア政府の意向とは関係をもたない、それどころか政府による禁令にさからってロシア人住民が「勝手に」移住してロシア的要素を浸透させていくケースもあった。

南部辺境において農民逃亡を主たる原動力にすすめられたカザーク社会の形成は後者の例の典型である。ロシアの農奴主のもとから逃れてきた農民にとっては、南方への移動は官憲の目を逃れながらの逃避行にほかならない。国家権力による保護など期待すべくもない彼らは、道中の危険をしのぐのはもとより、逃れついた先でも自分たちの力で居場所を確保し、あらたな環境への適応をとげて生きのびていかねばならなかった。そこですすんだのが、南方のステップを生活の場としていたタタール人との共生であり、逃亡ロシア人はタタール人と文化的融合をとげながらカザーク社会を形成していった。

かつて、ソ連期にあってはカザークの出自としては、もっぱら逃亡農民起源説が唱えられ、そこから彼らの反農奴性的性格が説明されていた<sup>20)</sup>。これに対し1980年代以降はカザークの起源におけるタタール人の役割の重要性が指摘されるようになった。ロシア南方のステップがロシア、ウクライナからの農民の逃亡先であったのは、たしかであるが、ここを避難所としたのは、一人彼らだけではなかった。タタール人社会から逃れてきた者たちもいたというのである。

スクリーンニコフは、カザークはタタール人と逃亡ロシア人との共生関係のなかから生まれたが、数的に優勢だったのはタタール人の方であったと言う<sup>21)</sup>。また、ニキーチンは、13世紀のモンゴルの来襲の後ステップを避難所としたのは、なによりもまずタタール系の人々であり、カザークなる制度にしてからテュルク=タタール世界のあらゆる遊牧民のあいだに見られるものなのであった<sup>22)</sup>と指摘し、このカザーク社会が、後にロシア人集団としての性格を強めていったのは、16世紀以来彼らの間にロシア（とりわけリャザン公国領）からの逃亡者が増えていった結果であるが、それでも、17世紀にいたってなおタタール人はカザークの構成要素として大をなした<sup>23)</sup>、と言う。

起源におけるタタール人の要素は、カザークの伝承の中にも影を落としている。たとえばヤイク・カザークの起源説話である。カスピ海の北岸のヤイク河（後のウラル河）のほとりに住むヤイク・カザークのあいだにはグーグニハなるタタール人の老女によって語られたというカザークの起源についての説話が伝えられていた。それによれば、タタール人の3兄弟の末弟の妻であったグーグニハは3兄弟とともにヤイク地方にたどり着いた後、飢えをしのぐため自分の髪の毛でつくった網で魚をとっていた。ところが、すでにこの地に来ていたカザークの一団による急襲を受けてタタール人3兄弟は殺され、グーグニハはカザークの頭目（アタマン）のものとなったというのである<sup>24)</sup>。略奪婚のかたちをとることが多かった初期のロシア人カザークとタタール人女性との結びつきのありようを反映した話である。それとともに、グーグニハが説話のなかでヤイク地方における漁労の創始者として登場している点についても、後代カザークの生活の柱となる漁業を彼らに伝えた文化英雄としてのタタール人の側面を伝承する話として注目したい<sup>25)</sup>。

また、カザークの異文化摂取の問題を考えるにあたっては、共生や通婚を軸とした人的交流とともに、自然環境への適応という側面も考慮するべきであろう。元来、森林地域の住民であったロシア人のカザークは、ステップに進出すると、ここで騎馬の民であったタタール人との接触により騎乗の術に習熟するようになり、剽悍な騎兵となっていった。ちなみに前出のグーグニハの物語で

は、彼女の夫であったタタール人兄弟の末弟は、馬を探しにステップに出かけ、数頭の馬を連れてそこからもどったところをカザークに襲われ落命している<sup>26)</sup>。カザークは女性のみならず、馬をもタタール人から受け継いだという事情をほうふつとさせる話である。

カザークのあとを追うように進められたロシア国家のステップへの南下は大略18世紀の末までには完了する。その後、ロシアはカフカース地方や中央アジアへと進出し、軍事的征服によってこれらを版図に加えていった。

あたらしくロシア領となったこれらの地域は、ロシア人にとっては、別世界といってもよい場所であった。ロシア人が本来の居住域としていたのは広大な平野部の森林地帯であり、冬季にはあたり一面を雪で覆われた銀世界のなかで過ごしていた。こうした環境に慣れたロシア人からすれば、一年生の草本が茂るステップはかなり異質な空間であった。まして嫋嫋たる山並みが連なるカフカースや太陽と砂漠の中央アジアにいたっては、まったくなじみのない異世界であった。この点、南方の辺境へのロシア人の進出は、生活圏の平面的な拡張にとどまらない、生活環境の質的な多様化をも意味したのである。

異なる環境への適応をとげるにあたりカザークは近隣に在住する諸民族の風俗を積極的に取り入れた。たとえばカフカースに住んだグレーベン・カザークである。ロシアの文豪トルストイは、1851年から54年にかけての20代の若き日にカフカースにおもむき軍務に就いた経験を持っている。その時かの地に住むグレーベン・カザークに接したトルストイは、彼らが敵手にあたるカフカース諸民族の言語、風習を取り入れ、それを誇りやかにしているさまを中編小説『カザーク』<sup>27)</sup>のなかでつぎのように記している。

「チェチェン人に囲まれて暮らしているあいだにカザークは、彼らと縁戚関係を結び、山民の風俗、生活様式、習慣を身に着けた。しかし、ここにあってもロシアの言葉と旧来の信仰を、かつてのままの純然とした姿で保っていた」<sup>28)</sup>。

言語と宗教において「古きロシア」を保ちつつカフカースの人と環境に適応した暮らしを送っていたカザークにとっては、カフカース征服のためロシ



ア各地からかの地へと送り込まれてきたロシア人=兵士は違和感をおぼえざるをえない存在であった。「今日にいたるもなお、カザークはチェチェン人と縁者であり、自由、遊惰、略奪、戦争などへの愛着が、彼らの性格の主たる特徴となっている。ロシアの影響は、(カザークの役職者の…中村)選挙制度の制限、鐘の撤去、軍隊の当地への駐屯や通過といった好ましからざる面にのみあらわれている。カザークは、好みからすれば、自分の兄弟を殺した山民のジギット(勇士)よりも、カザークの村を守るべく彼らのもとに駐屯し、彼らの家でタバコをふかしている兵士の方を憎むことがはなはだしい。カザークは敵である山民をあっぱれと思う一方で、自分にとって赤の他人で迫害者である兵士を軽蔑している」<sup>29)</sup>。

四囲の山民と敵対しつつも彼らに一目置いていたカザークは相手からさまざまなものを取り入れた。「粹な身なりとは、チェルケス人のまねをすることである。良い武器は山民のもとから得られ、良い馬も彼らから買い取ったり、盗んだりして手に入れる。カザークの若い衆は、タタール語を知っているのを自慢げにひけらかし、飲んで騒ぐおりなどには自分の兄弟とさえタタール語で話す」<sup>30)</sup> というような具合であった。

### おわりに

ロシア国家の領土の周縁部にあたる辺境は、領土拡大の先端部分であるとともにロシアと周辺諸国、近隣の諸民族との接触、交流の場所であった。

ロシアの版図拡大に際してその先端部分となった辺境は、その後辺境がさらに前進するにつれてロシアの国境の内側に取り込まれて「内部化」し、それにともないかつての辺境としての性格を失っていった。こうした、辺境の変化のなかでそこに住む人間集団とロシア国家の関係も変化していった。カザークとロシア国家の関係は、まさしくそういう性格を色濃く帯びていた。

成立当初はロシアに対し自立的な立場を保持し、独立勢力たるのおもむきを持っていたカザーク地域は、辺境の前進とともにロシア国家への従属性を強め、ついにはロシアの一地方と化していった。これは漸進するロシアの辺境がカザ

ーク地域へと接近し、ついにはこれを吸収するにいたるプロセスにほかならない。

ロシアの辺境が拡大し、カザーク地域を併呑するにいたるまでの過程は、大まかに言って、つぎの4つの段階に区分される。最初は、ロシアの辺境がそもそもカザーク地域にまで達していない段階、カザーク地域がロシア国家の支配領域の外にある「遠隔」であり、カザークが自由、自治を享受している状態である。ついで、ロシアの領土拡大にともないその辺境がしだいにカザーク地域にせまってくる「接近」の段階がある。これにともないカザークの独立性、自立はしだいに脅かされるようになる。3番目がカザーク地域がロシアの国境地帯として吸収される「包含」の段階である。その後、ロシアの辺境がカザーク地域を越えてさらに前進すると、カザーク地域も国境地帯としての性格を失い「内部化」するにいたる。この段階では、カザーク軍団は国境警備の機能を失い、しばしばロシア政府の命によって、移住を強いられあらたな場所で国境警備の任に就くこととなった。

また、ロシア人と近隣の諸民族の接触、交流の場としての辺境のありようは、カザークが非ロシア諸民族との通婚や異文化の取り入れによって、独特な発展をとげるのを助長した。主として逃亡農民からなるカザークの先祖たちは、ロシア国家の後ろ盾無しに南方で生き延びていかざるをえなかった。彼らは、タタール人をはじめあらたな隣人となった諸民族と共生、文化交流しながら存続しようとしたのである。こうした事情は、カザークの起源をめぐる説話となって伝わり集合の記憶として残った。ロシアから遠方にのがれてきたため中央部との結びつきを弱めていたカザークは、「古きロシア」を保つ一方で、近隣諸民族の習俗をとりいれて彼らと文化的融合をとげたのである。

#### 注

- 1) 辺境の過渡的な性格を言うにあたっては一時的なロシア領と辺境との差異に注意しなければならない。ロシアの支配に服した時期があったとしてもそれが比較的短期間のあいだでしかなく、「内陸化」も経験しなかったような地域、たとえば19世紀にロシア領となり20世紀中に独立したポーランドや中央アジア諸国は辺境というよりもむしろ一時的にロシ

ア領となった地域とみなすべきであろう。

- 2) В. Х. Казин. Казачьи войска. СПб., 1912, с. 6.
- 3) 帝政時代の末には自由カザークよりも勤務カザークこそがカザークの本流であるとの説さえ唱えられた。1907年に出された『陸軍省百年史 (1802-1902年)』11巻第3部は、「カザークの歴史は都市カザークの誕生した15世紀前半にはじまる」とし (Столетие Военного министерства 1802-1902. т. XI, ч. 3. СПб., 1907, с. 6), 自由カザークが形成されるにあたってこれを集団としてまとめあげるうえで、そのなかに入り込んでいた勤務カザークが重要な役割をはたしたという (Там же, с. 8)。
- 4) シベリアにおける勤務者の一カテゴリーとしてのカザークについては Н. И. Никитин. Служилые люди в Западной Сибири XVII в. Новосибирск, 1988 参照。
- 5) ザポロージェ・セーチの設立については, Л. Падалка. По вопросу о существовании Запорожской Сичи в первые времена запорожского козачества. 《Киевская старина》, т. XLV, 1894, апрель, 1894, май и июнь 参照。
- 6) George Vernadsky, *A History of Russia*, New Haven and London, 1951, pp. 4-5.
- 7) スヴァトスラフはヴォルガ流域のハザール汗国に侵攻した後, ドナウ方面に遠征し, その帰途に遊牧民のペチェネグ人の急襲を受けて落命した。
- 8) ヴェルナツキーの時代区分については, G. Vernadsky, op. cit., pp. 10-13 参照。
- 9) モスクワとクリミアが共同して支援していたカザン汗のムハメッド=エミンが1518年に死亡した後, ロシアとクリミヤは, 自分の推す候補をカザンの汗位に就けるべくしのぎをけずって争うようになった。そのなかでもカザン史においてとりわけ重要な役割をはたしたのが, ロシアの推したシャフ=アリーとクリミヤ汗の一族であるサファ=ギレイである。カザンの汗位をめぐる争いは1552年のロシアによるカザン汗国の征服, 併合をもって一応ピリオドを打つのであるが, その間1519年から52年にかけてカザンに君臨したのべ10代の汗のうちシャフ=アリーとサファ=ギレイはそれぞれ3代, 計6代にわたって汗の位にあり, 時期的にも3分の2以上の期間が両者の治世によって占められた。
- 10) Р. Г. Скрынников. Сибирская экспедиция Ермака. Новосибирск, 1982, с. 78-85.
- 11) А. И. Михайлова. Служба донских казаков по охране южных границ Русского государства в XVII в. 《Вестник МГУ》, 1956, No. 2, с. 143-44 ; История Дона с древнейших времен до падения крепостного права. Ростов-на-Дону, 1973, с.110.
- 12) А. А. Новосельский. Из истории донской торговли в XVII в. 《Исторические записки》, т. 26, с. 98-99 ; С.Тхоржевский. Донское войско в первой половине XVII в. 《Русское прошлое》, 1923, сб. 3 с.11.
- 13) Акты, относящиеся к истории Войска Донского, собранные А. А. Лишным (以下, Акты Лишина と略). т. I. Новочеркасск, 1891, No. 6.
- 14) А. А. Новосельский. Из истории донской торговли в XVII в., с. 199.
- 15) В. Х. Казин. Казачьи войска, с. 51.
- 16) 1637年当時, アゾフには二百門の大砲を擁する四千名のトルコの守備隊がたてこもって

## ロシア辺境の拡大とカザーク（中村）

いた（М. Я. Попов. Азовское сидение. М., 1961, с. 45 ; Ю. А. Тихонов. Азовское сидение. 《Вопросы истории》, 1970, No. 8, с. 99）。

- 17) История Дона с древнейших времен до падения крепостного права, с.138 ; М. Я. Попов. Указ. соч., с. 44.
- 18) 17世紀のドンのロシアへの従属については, 拙稿「17世紀におけるドン・カザークの変貌——対ロシア関係を中心に——」(『西洋史学』124, 1982年) 参照。
- 19) Полное собрание законов Российской империи, 1-е.изд. СПб., 1830 (以下 ПСЗ と略記), т. VI, No. 3750.
- 20) И. Г. Рознер. Антифеодальные государственные образования в России и на Украине в XVI-XVIII вв. 《Вопросы истории》, 1970, No. 8, с. 47 ; А. П. Пронштейн. К истории возникновения казачьих поселений и образования сословия казаков на Дону. 《Новое о прошлом нашей страны》. М., 1967, с. 163.
- 21) Р. Г. Скрынников. Сибирская экспедиция Ермака, с. 64.
- 22) Н. И. Никитин. О происхождении, структуре и социальной природе сообществ русских казаков XVI-середины XVII в. 《История СССР》, 1986, No. 4, с. 168.
- 23) Там же.
- 24) П. И. Рычков. Топография Оренбургской губернии. Уфа, 1999, с. 196-98.
- 25) ゲーグニハ説話については, 拙稿「ヤイーク・カザークの起源説話——ゲーグニハと18世紀ヤイーク社会——」(『関西大学文学論集』54巻4号, 2005年) 参照。
- 26) П. И. Рычков. Топография Оренбургской губернии, с. 197-98.
- 27) 『カザーク』が発表されたのは1863年であるが, 執筆されたのはトルストイのカフカース在住中の1852年であった。
- 28) Л. Н. Толстой. Полное собрание сочинений, т. 6, М., 1936 (reprint 1972), с. 15.
- 29) Там же, с. 16.
- 30) Там же.

本研究は, 平成17年度関西大学国内研究員研究費によって行った。